

情けは人のためならず

あけまして おめでとー

ございます

コロナも三年を過ぎ、緩和されたとはいえ、まだ終息は先が遠いものがあるようです。

さて、今年最初は 宗教学者のひろさちや氏のエッセイに書いてあったお話からはじめます。——インドを旅行中、行きずりのインド人に道を尋ねたことがある。「そこはわかりにくい。わたしが案内しよう。」気軽にそう言って、彼は私を案内してくれた。でも

なかなか目的地に着かず、私も少々不安になってきた頃、

やっと三十分かけて到着した。ということは、彼は三十分間も私に付き合ってくれたわけだ。見ず知らずの外国人にそこまでの親切をしてくれるインド人に、私は胸がいっぱいになった。そこで、持っている電卓を彼にプレゼントしようとした。だが、彼は受け取らず、「私はあなたに親切にしました。だから、あなたは、この次、誰かに親切にしてやって

欲しい。それが私に対するお礼になるんだよ。」と言った。

私は涙がこぼれそうになった。——と書いています。

「情けは人のためならず」ということわざがあります。これを「なまじ人に情けをかけると、その人は甘やかされて駄目になる。だから、情けはその人のためにならない。情けを人にかけるな」と解釈されることがあります。それは間違いで、本当の意味は、「人に情けをかける、それがめぐりめぐって自分に返ってくる。だから、情けは人のためではなく、自分のためである。」という意味なのです。仏教では、この世界は「縁」の世界であると説いて

います。「縁」の世界とは情け・親切が、自分のところに戻ってくる世界です。

「一樹の陰に宿り、一河の流れを汲むことも 皆これ他生の縁ぞかし」という言葉は、古来いろいろな謡曲や物語に使われてきました。この意味は「他人同士が同じ木の陰に宿ったり、同じ川の水を飲んだりする何気ない出会いであっても、偶然ではない。前世からの因縁あつてのことである。」ということなのです。今年こそ、情けや親切は、めぐりめぐって自分に返ってくる、と信じられる世の中、他人の善意が信じられる世の中になることを願うばかりです。